ブリュッセル、王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ（E.2157）

近　藤　二　郎

The Relief Fragment of Queen Tiye at the Royal Museums of Art and History, Brussels (E 2157)

Jiro KONDO

Abstract

The relief fragment of Queen Tiye displayed at the Royal Museums of Art and History, Brussels came from the tomb of Userhat (TT 47), located at al-Khokha in the Theban Necropolis, Egypt. Userhat was the "Chief of the Royal Harem" at the end of the reign of Amenhotep III (1388-1351 B.C.). The tomb of Userhat was excavated by the village chief, Umda, of al-Qurna Village in 1902-03. Howard Carter reported the details of this excavation in volume 4 of *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* (*ASAE)*, as "A small excavation in the Assasif Western Thebes", accompanied by a photograph (Fig.3) of the relief of Queen Tiye seated beneath a kiosk with her husband, Amenhotep III. Later, a fragment of the queen's portrait was cut from this relief and smuggled out of Egypt. In 1905, Jean Capart purchased this relief fragment at an auction in Paris on behalf of the Brussels Royal Museums of Art and History. This portrait was displayed under the title of "*Queen Tiye Relief*" in the *Cleopatra and the Queens of Egypt* exhibition held in Tokyo and Osaka in 2015. Since 2007, the Institute of Egyptology, Waseda University has been excavating at al-Khokha to locate the tomb of Userhat. In the second field season, 2008, we rediscovered his tomb. In the fifth field season, from December 2011 to January 2012, further digging revealed a scene showing a kiosk and beautiful sacred serpents with sun disks. Beneath the kiosk and serpents, we finally rediscovered the traces of the section from which the portrait of Queen Tiye wearing the double-plume crown had been removed.

はじめに

2015 年 7 月 11 日～12 月 27 日にかけて、東京（東京国立博物館）と大阪（国立国際美術館）で開催された『クレオパトラとエジプトの王妃展』に、出品展示されていたベルギー、ブリュッセルの王立美術歴史博物館（Musées Royaux d'Art et d'Histoire, Bruxelles）所蔵の「アメンヘテプ 3 世の王妃ティイのレリーフ」の写真は、展示カタログの表紙にも使用されており、この展覧会を代表する作品であった（近藤 2015）。

新王国第 18 王朝 9 代目（ハトシェプスト女王を含む）の王アメンヘテプ 3 世の王妃ティイの肖像を表現したこのレリーフ（E.2157）は、元来、エジプト・アラブ共和国ルクソール西岸のアル＝コーカ地区（al-Khokha）に造営された第 18 王朝アメンヘテプ 3 世治世下の高官ウセルハト（*wsr-ḥ3t*）の墓（テーベ岩窟墓第 47 号、以後 TT 47 と表記する）の前室の壁面を飾っていたものである。ウセルハトは、「後宮（ハーレム）の長官」などの称号を持つアメンヘテプ 3 世治世晩年の高官であった。

本稿では、この王妃ティイのレリーフが、いつ、だれによって、どのような経緯で、エジプトのルクソール西岸にあった岩窟墓からブリュッセルへと流失したのか、さらに、このレリーフがどのような題材の壁面を飾っていたのかなど、同時代の同様なレ

リーフ装飾を持つ岩窟墓のレリーフと比較することで解明していきたい。

1．ブリュッセルの王立美術歴史博物館の王妃ティイのレリーフ

本稿で扱うベルギー、ブリュッセルの王立美術歴史博物館に所蔵・展示されているアメンヘテプ3世（在位：前1388〜前1351年頃）の妃ティイのレリーフ（図1）の詳細について記すと次のようになる。

まず、寸法としては、高さ42cm、幅39cm、ティイ王妃の横顔の肖像が、高浮彫で表現されている。王妃の額部分には、下エジプトの赤冠と上エジプトの白冠を被った2匹のウラエウス（聖蛇）が付けられている。王妃の後頭部を護るように、翼を広げ足にシェン（*šn*）を掴んだハヤブサが表現されているが、一般的には、王妃の頭部の表現では、ハゲワシが使用されることが多い。

このレリーフは、1905年にパリのオークションに出品され、ジャン・カパール（Capart, Jean）が王立美術歴史博物館のために購入したものである。記録によるとオークションでの入札価格は僅か180フランと極めて安価であったが、これはオークションのカタログには、作品の写真は掲載されず、「プトレマイオス朝時代の肖像のレリーフ」と記されていたことによるとされる。オークションに出品された段階では、王妃のレリーフには図2に見られるような数多くの落書きが書かれており、購入後、博物館で慎重にクリーニングが実施された（van de Walle et al. 1980）。

オークションでこの王妃のレリーフを購入したジャン・カパールは、ベルギーのエジプト学者で、1897年から1942年に引退するまで長年にわたり王立美術歴史博物館に勤務していた人物である。そして、1907年までにカパール自身により、本レリーフが1903年のエジプト考古局年報（*Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*；以下*ASAE*と略）第4巻にハワード・カーター（Carter, Howard）が、「1902〜03年の上エジプトの作業報告」の中で「5. 西テーベ、アサシーフの小発掘」と題して報告・掲載している王妃ティイのレリーフと同一であることを確定したのであった。

2．1902〜03年の発掘調査

ウセルハト墓（TT 47）の1902〜03年冬に実施された発掘調査に関して、前述した*ASAE*第4巻にカーターが報告している。それによると、この発掘は、クルナ村（al-Qurna）の村長（ウムダ；Umda）が、考古局事務所に対し、自分の家の裏手50mに位置する墓を開ける許可を申請してきた。考古局事務所の責任者であったカーターが監視を派遣するこ

図1　ブリュッセルの王立美術歴史博物所蔵の王妃ティイのレリーフ（E.2157）

図2　1905年に購入され、クリーニングされる前の王妃ティイのレリーフ。顔や体の部分に多くの落書きがある。（de Walle et al. 1980, Fig.3）

とを条件としてこれを許可した経緯が報告されている。このウムダによる発掘は、カーターによる記述から、1902 年 12 月～1903 年 1 月前後に実施されたものと考えられるが確証はない。

この報告に記されているクルナ村のウムダの家は、2006 年まで存在していたが、2006 年に当時のルクソール知事であったサミール・ファラグ（Samir Farag）によるルクソール西岸の「新クルナ村」移転計画において撤去され、現在は「電話室」の基礎部分だけが残されている。

カーターが記した「西テーベ、アサシーフの小発掘」は、極めて簡単な報告であり、文章は僅か 28 行しかないが、ウセルハト墓の前室壁面に施された未完成で、部分的に破壊されている高浮彫について次のように記されている。「従者を伴った被葬者（ウセルハト）が、キオスクの前に立っており、キオスクの内部には、アメンヘテプ 3 世と王妃ティイが玉座に座っている。それらの図像の下には、九弓の民のリストが記されている。これらのレリーフ装飾は素晴らしい技量で、この王妃ティイの場合は、これより良い肖像を見た覚えはない。また部屋（前室）の残りの部分は碑文もなく、天井の大部分は崩落している（Carter 1904）。」

図 3 が、カーターが *ASAE* 第 4 巻に掲載したウセルハト墓（TT 47）の前室に施されていた王妃ティイのレリーフである。このカーターが報告した王妃ティイのレリーフの写真（図 3）と王立美術歴史博物館所蔵の王妃ティイのレリーフ（図 1）とを詳細に比較してみよう。

図 3 が撮影された時期は、1903 年初めのことと考えられる。パリのオークションにこの王妃ティイのレリーフが出品されたのが 1905 年であるため、ウムダによる小発掘が終わった直後に、何者かの手でウセルハト墓の壁面から剥ぎ取られ、エジプトの国外に持ち出され、パリに運ばれたのである。

王妃ティイの肖像を描いたレリーフ断片が、パリのオークションに 1905 年に出品された 3 年後の 1908 年夏に、考古局事務所の主任査察官であったウェイゴール（Weigall, A. E. P. 1908）が、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区とアル＝アサシーフ地区の岩窟墓の登録作業を行い、TT 45～ TT 100 までの 56 基の墓の状況を報告しているが、この時期には既にカーターにより報告されたアメンヘテプ 3 世の王妃ティイのレリーフは、前室の壁面から剥ぎ取られ、流出していたのであった。

図 3　ウセルハト墓前室の王妃ティイのレリーフ（Carter 1904, Pl II）

ブリュッセル王立美術歴史博物館の王妃ティイの被る冠の上部は欠損しているため、冠の全容を捉えることができないが、ウセルハト墓壁面に施された王妃のレリーフには、はっきりと 2 枚羽根飾りの冠が描かれている。この上部に 2 枚羽根飾りのある冠は、王妃ティイに特徴的な冠である。羽根飾りの基部には、日輪を戴く聖蛇（ウラエウス）の装飾のある円形の輪があり、7 匹の聖蛇が描かれている。

王立美術歴史博物館のレリーフは、図 3 の中央よりやや上にある亀裂を利用して剥ぎ取られたものである。図 1 には、王妃ティイの肖像だけが描かれており、銘文などの文字は一切存在していないが、図 3 を見ればわかるように、王妃ティイの顔の前方には、縦書き 2 行の銘文があったことがわかる。このことから、現在、ブリュッセルの王立美術歴史博物館に所蔵・展示されている王妃ティイのレリーフ断片から、明らかに人為的にヒエログリフの銘文が削られ、王妃ティイの肖像として整形されていることがわかる。

3. ウセルハト墓の再調査（2007年12月～）

前述したウェイゴールの訪問（1908年夏）の後、ウセルハト墓（TT 47）は、厚い堆積砂礫に覆われてしまいアクセスできない状態になってしまった。このウセルハト墓の位置する北側には、岩窟墓を利用して住民が居住していたため、この地域全体の発掘調査を実施することは長年にわたって困難な状況にあった。

そのため早稲田大学が、ルクソール西岸で1984年12月から本格的にアメンヘテプ3世時代を中心とする時期に属するテーベ西岸岩窟墓の比較調査を実施したが、対象とした新王国第18王朝時代の岩窟墓は、トトメス4世（在位：前1397～前1388年頃）から第18王朝末期のホルエムヘブ王（在位：前1319～前1292年頃）までの期間の新王国第18王朝時代後期から晩期の岩窟墓をリスト・アップし

図4　ウセルハト（TT 47）の入口上部のリンテルのレリーフ

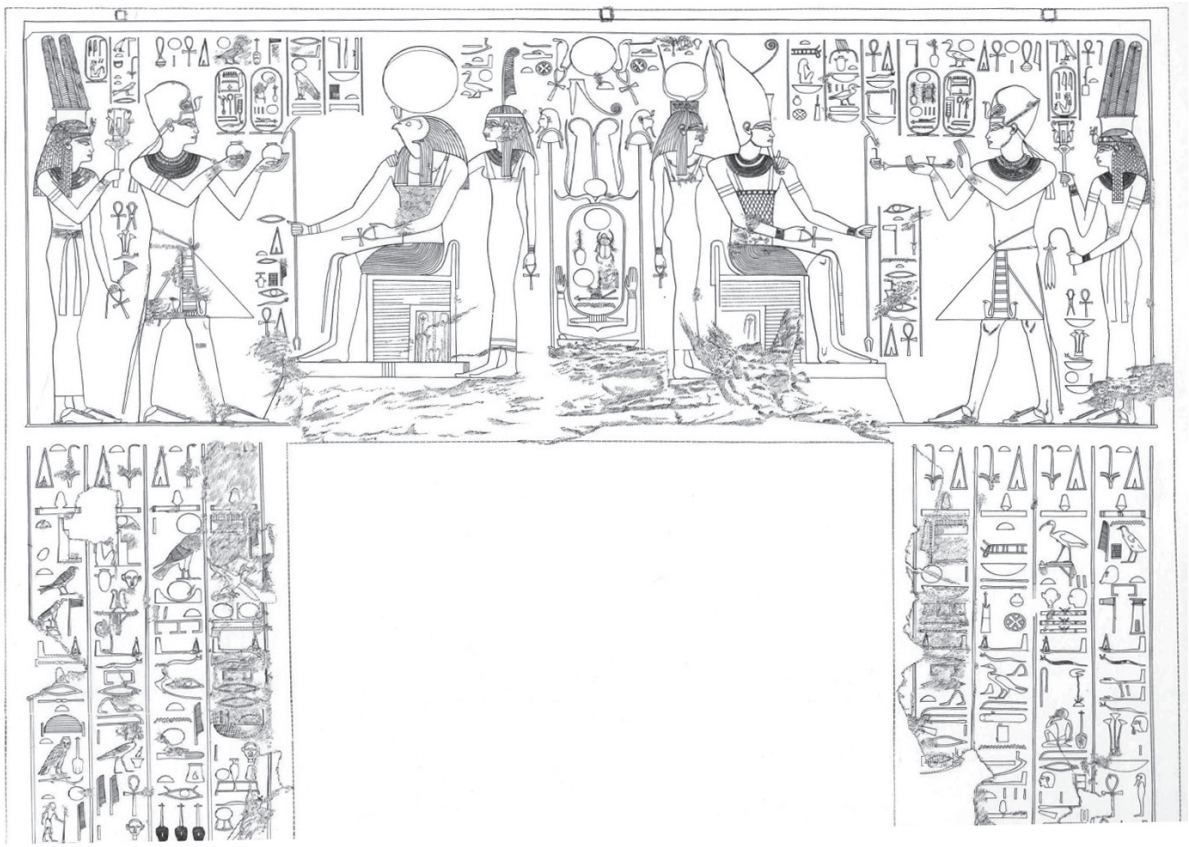

図5　ケルエフ墓（TT 192）の墓のゲート上部のリンテルのレリーフ。中央には、アメンヘテプ4世の即位名が刻されている。（The Epigraphic Survey 1980, Pl.8）

て調査を実施した。ウセルハト（TT 47）も当然ながら、リストに含まれていたが、堆積砂礫に覆われており、調査が出来なかった。そのため、当時から将来、調査を実施したい当該期の重要な岩窟墓のひとつとみなしていた。

しかしながら、21 世紀に入るとルクソール西岸地域において、ルクソール市当局（サミール・ファラグ知事）により、岩窟墓が分布する地域に居住している住民の民家の強制的な撤去が実施されるようになり、アル＝クルナ村北に位置するアル＝ターリフ（al-Tarif）地区の北側の地区への大規模な移住計画が実行に移され、新クルナ村（後に新クルナ市）の建設が開始された。

アル＝コーカ地区においても、ウセルハト墓（TT 47）が位置する場所付近の民家の強制撤去が実施されたため、2006 年に前エジプト考古庁（現在のエジプト考古省）に調査の申請を提出し、正式な調査許可を取得し、本格的な発掘調査を実施出来るこ

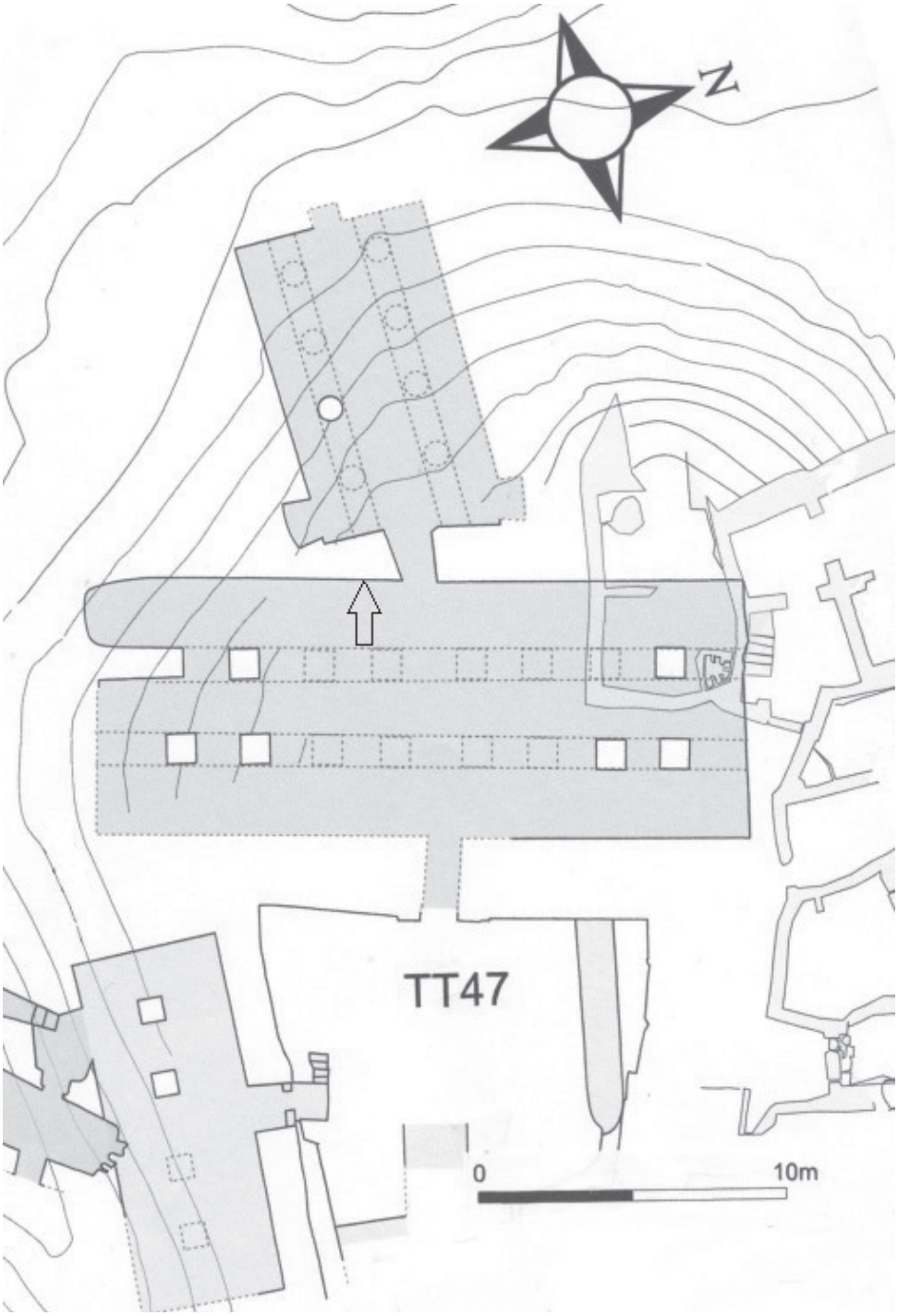

図 6　ウセルハト（TT 47）の平面図と王妃ティイのレリーフのあった位置（↑）

とになった。

第1次調査は、2007年12月から2008年1月にかけ実施された。ウセルハト墓の北側に位置する4基の岩窟墓（TT 174、TT-62-、TT264、TT-330-）のクリーニング調査も実施した。

2008年12月から2009年1月にかけて実施された第2次調査では、ウセルハト墓（TT 47）の入口部を検出し、TT 47を再発見することが出来た。この発見により、ウセルハト墓の主軸線が、これまで考えられていた南北ではなく、東西であり、岩窟墓の入口がアマルナ時代直前の他の大型岩窟墓と同様に、東に向いていることが判明した。

さらに、入口上部のリンテル部には、太陽神アトゥムとラー・ホルアクティ、そしてマアト女神と西方の女神を礼拝する被葬者ウセルハトの姿を表現した精緻なレリーフが施され、その中央部分にはアメンヘテプ3世の即位名であるネブ・マアト・ラー（*nb-mꜣʿt-rʿ*）を刻したカルトゥーシュが位置していた。同様な題材を持つレリーフとしては、テーベ西岸のアル＝アサシーフ地区のアメンヘテプ3世治世末期のケルエフの墓（TT 192）のレリーフがある。

ケルエフ墓とウセルハト墓のレリーフを細かく比較してみると次のような差異が見られる。ウセルハト墓（TT 47）では、太陽神アトゥムの後方に西方の女神が立っているが、ケルエフ墓ではハトホル女神となっている。また、ウセルハト墓では、墓の被葬者であるウセルハトが太陽神を礼拝しているのに対して、ケルエフ墓では、被葬者のケルエフではなく、アメンヘテプ4世と王の実母である王妃ティイが描かれている。

以上により、これら二つの岩窟墓は、ともにアメンヘテプ3世治世の最末期の岩窟墓であるが、ウセルハト墓（TT 47）が、ケルエフ墓（TT 192）より時期的にやや先行するものである。また、アトゥム神やラー・ホルアクティ神などの太陽神を礼拝しているのが、墓の被葬者ウセルハトであるのに対して、ケルエフ墓（TT 192）では、被葬者のケルエフではなく、王であるアメンヘテプ4世（後のアクエンアテン王）へと変化している。

岩窟墓の正面に、アトゥム神やラー・ホルアクティ神といった北のヘリオポリスの影響を強く受けた太陽神を描き、ナイル東岸から昇ってくる日の出の太陽の光を真正面から受けるように岩窟墓のプランが東向きに作られていることが、アマルナ直前の時期の岩窟墓の特徴であると言えよう。ネクロポリス・テーベにおいては太陽神アテンが登場する前に、アトゥム神とラー・ホルアクティ神という北のヘリオポリスで崇拝されていた太陽神が、墓の装飾につかわれている事実も興味深い。

その後も毎年12月から1月にかけて、ウセルハト墓（TT 47）の発掘調査は実施され、墓内部の堆積砂礫の除去作業が継続された結果、前室の天井の大部分が崩落しており、調査は難航を極め、壁面の多くは未装飾発掘で碑文もレリーフも発見することができなかった。

2011年12月から2012年1月にかけて行われた第5次調査において、前室の奥壁（西壁）の南側部分で美しい文字列の碑文が検出され、掘り進めて行ったところ、日輪を頭上に戴く聖蛇（ウラエウス）の並ぶキオスクが姿を現した。そして、ついに、その下から王妃ティイの王冠の2枚羽根飾りが見つかり、王妃の顔の部分を削った痕跡も発見された。ウセルハト墓（TT 47）のアメンヘテプ3世の図像の拡大図が図10であり、この部分を詳細に見ると落書きが残されていることがわかる。このことにより、現在、ベルギーのブリュッセルにある王立美術歴史博物館に収蔵・展示されている王妃ティイのレリーフがかつてあった場所を確定することが出来たのである。ハワード・カーターが、1903年にASAEの第4巻に、ウセルハト墓の写真を発表してから実に109年もの歳月が流れていた。

ウセルハト墓の前室西壁の南側で検出されたアメンヘテプ3世と王妃ティイの座る聖蛇ウラエウスによって装飾されたキオスク周辺の図像は、相当部分が削られている（図8）。キオスクの下には、青冠を被るアメンヘテプ3世の姿が描かれていたが、現在は王の顔の部分は削られて残されていない。

キオスクに王と王妃が描かれるレリーフの題材は、ケルエフ墓（TT 192）に存在している（図7）。ウセルハト墓のキオスクとは左右反対の向きであるが、ほとんど同じ題材を扱ったものである。王妃ティイの前に座るアメンヘテプ3世は、青冠を被り、手には王笏と殻竿を両手に持った姿で描かれている。ケルエフ墓の壁面に施されたアメンヘテプ3世もまた王笏と殻竿を手にしている。ケルエフ墓のものは、アメンヘテプ3世の第3回セド祭（王位更新祭）の場面を表わしているとされる。

王と王妃の玉座の下には、階段のある台座があり、

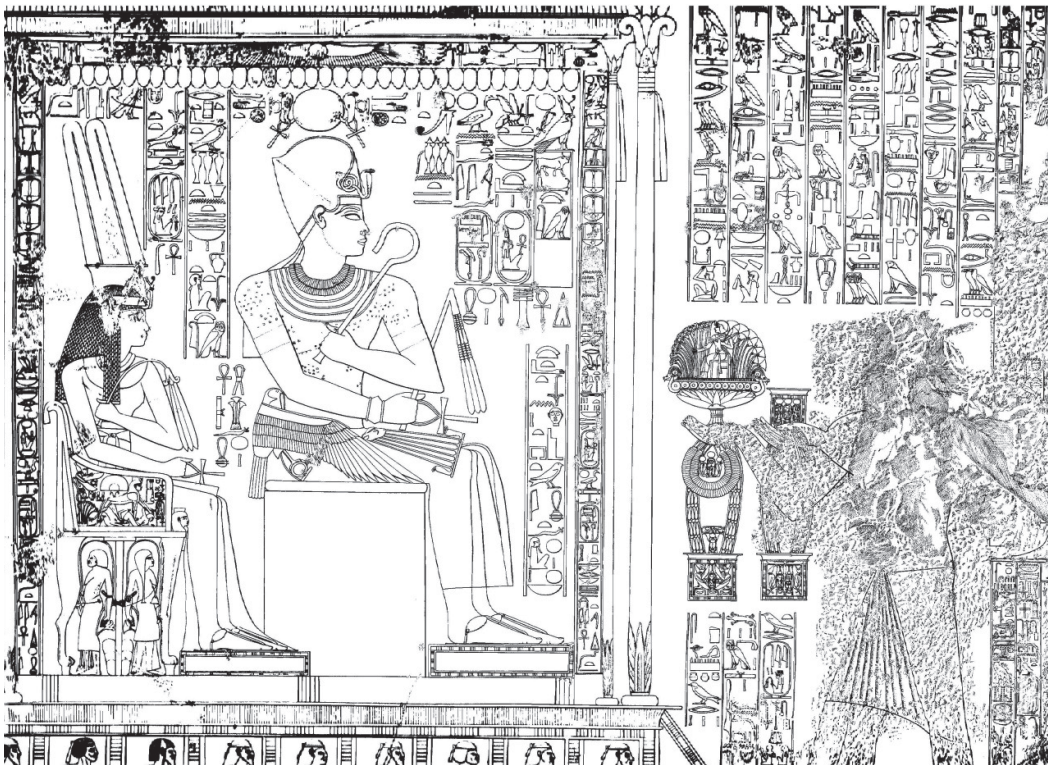

図 7　ケルエフ墓（TT 192）に描かれたキオスクに座るアメンヘテプ 3 世と王妃ティイ
（The Epigraphic Survey 1980, Pl.47）

図 8　ウセルハト墓（TT 47）で検出されたキオスクに座るアメンヘテプ 3 世と王妃ティイ

その側面には「九弓の民」の図像が描かれていた。カーターは、ASAE 第 4 巻の中で、ウセルハト墓の場合も、王と王妃の座るキオスクの下部には、同様に「九弓の民」のリストがあると記しており、今後、下部に発掘が及べば、九弓の民の図像を見つけることであろう。また、カーターは、キオスクの前に被葬者であるウセルハトと従者が描かれていたとしているが現在では破壊されており残存していない。

図 9　ケルエフ墓に描かれた王妃ティイ
（The Epigraphic Survey 1980, Pl.47）

図 10　ウセルハト墓のアメンヘテプ 3 世レリーフ（拡大）、アラビア文字の落書きが見られる。

また、青冠を被ったアメンヘテプ 3 世と王妃ティイの高浮彫りのレリーフは、ケルエフ墓に施されたレリーフ（図 7、9）よりも精緻で出来が良いものであり、ウセルハト墓で壁面にレリーフを施した職人の技術水準が極めて高いことを示している。

まとめ

ベルギー、ブリュッセルの王立美術歴史博物館所蔵のエジプト新王国第 18 王朝アメンヘテプ 3 世の妃ティイのレリーフに関し詳細に検討をおこなった。その結果、このレリーフ断片は、エジプト・アラブ共和国のルクソール市西岸のアル＝コーカ地区に位置する第 18 王朝のアメンヘテプ 3 世治世末期の高官ウセルハトの岩窟墓（TT 47）の前室奥壁（南側）に施されていた高浮彫のレリーフであったことを明らかにした。

ウセルハト墓の発掘は、1902～03 年にアル＝クルナ村のウムダ（村長のこと）によって実施された小発掘により発見されたもので、当時のルクソール西岸の考古局事務所の責任者であったハワード・カーターが、考古局年報（*ASAE*）の第 4 巻にウセルハト墓の壁面にあったティイの肖像を表したレリーフの写真とともに報告している。また、このレリーフの王立美術歴史博物館所蔵に至る来歴を調べたところ、1905 年に、パリで開かれたオークションによって入手されたことが判明した。さらに、2007 年 12 月から早稲田大学によって実施されているウセルハト墓の再調査によって、このティイ王妃のレリーフが装飾されていた前室の壁面の位置も確定することができている。

アマルナ時代直前のテーベ西岸の岩窟墓では、それまでの彩壁画ではなく精緻なレリーフ装飾が突如出現しており、北の伝統的なレリーフ装飾が南のテーベの岩窟墓に強い影響を与えていること、メンフィス系の職人たちが、ネクロポリス・テーベに流入したことを指摘した（近藤 2016）が、近年のネクロポリス・メンフィスの発掘調査により、メンフィスの墓の造営にテーベの絵師の存在が指摘されており（Zivie 2013）、アマルナ時代直前に北のメンフィスと南のテーベとの間で、墓作りの工人・職人たちの交流があったことが報告されている。

ウセルハト墓（TT 47）に描かれた精緻な王妃ティイのレリーフを材料として、アメンヘテプ 3 世時代のレリーフや王と王妃の表現の検討を実施し

た。アメンヘテプ3世～アメンヘテプ4世時代にネクロポリス・テーベの岩窟墓で起った劇的な変化は、来るべくアマルナ時代の変化の前兆であったともとらえることが出来るであろう。今後も本稿のように欧米などの博物館・美術館に所蔵されている古代エジプトの作品を通して、古代エジプト美術や社会の変化を捉えることができることが期待される。

謝辞

本研究は、科研費、基盤（A）研究代表者：近藤二郎、研究課題「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」・15H02610の助成を受けた。明記して感謝したい。

参考文献

Burzacott, Jeff　2016　“A stunning relief saved by tombs robbebers”, *Nile Magazine*, February 17, 2016,

Carter, H.　1903　“Report of Work done in Upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l'Egypte* (ASAE) , Vol.4

Davies, N. de G.　1908　*The Rock Tombs of Tell El-Amarna*, Part VI: Tombs of Parennefer, Tutu, and Aÿ, London.

Davies, N. de G. & Macadam, M. F. L.　1957　*A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Part 1, Oxford.

Eigner, D.　1983　“Das thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: die Architektur”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39: 39-50.

The Epigraphic Survey　1980　*The Tomb of Kheruef, Theban Tomb 192*, Oriental Institute Publications 102, Chicago.

Kampp, F.　1996　*Die thebanische Nekropole*, Theben 13, Mainz & Rhein.

O'Connor and Eric H. Cline　2001　*Amenhotep III. Perspectives on His Reign*, Michigan

Porter, B. and R. L. B. Moss, *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings: I. The Theban Necropolis, Part II. Royal Tombs and Smaller Cemeteries*, Oxford, 1964, 670-1

Rhind, A. H.　1862　*Thebes, its Tombs and their Tenants*, London.

Sakurai, K., Yoshimura, S. and Kondo, J.　1988　*Comparative Studies of Noble Tombs in Theban Necropolis (Tomb Nos. 8, 38, 39, 48, 50, 54,57, 63, 64, 66, 74, 78, 89, 90, 91, 107, 120, 139, 147, 151, 181, 201, 253, 295)*, Tokyo.

van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.　1980　*La collection egyptienne, Les etapes marquantes de son dereloppement*, Bruxelles.

Weigall, A. E. P.　1908　“Upper Egyptian notes”, *Annales du Service des Antiquités de l'Egypte* (ASAE) Vol.9, pp.105-112

Zivie, Alain　2013　*La Tombe de Thoutmes*, Toulouse.

近藤二郎　1994　「テーベ私人墓第47号」、『エジプト学研究』第2号、早稲田大学エジプト学会、50～60頁

近藤二郎　2016　「テーベ西岸の岩窟墓におけるアマルナ時代直前の変化」、『史観』第174冊、早稲田大学史学会、81～97頁

近藤二郎（監修・執筆）　2015　「アメンヘテプ3世の王妃ティイのレリーフ」、『クレオパトラとエジプトの王妃展図録』、東京国立博物館、NHK

近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合　望・高橋寿光　2014　「第6次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第20号、早稲田大学エジプト学会、43～57頁

近藤二郎・吉村作治・河合　望・菊地敬夫・柏木裕之・竹野内恵太・福田莉紗　2015　「第7次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第21号、早稲田大学エジプト学会、19～44頁。